

発行所 カトリック長崎大司教区 広報委員会
発行人 カトリック長崎大司教区 広報委員会
〒852-8113 長崎市上野町 10-34
カトリックセンター内
TEL095(843)3869 FAX095(843)3417
郵便振替番号 01880-5-2699
カトリック長崎大司教区ホームページ
http://www.nagasaki.catholic.jp
印刷所 株式会社 藤木博英社
〒850-0852 長崎市万屋町 5-13
TEL095(821)2146 FAX095(821)2148



題号変更のお知らせ

教区広報紙『よきおとずれ』を、
来年1月号より『カトリック
教報』に変更します。

教区報の歴史と使命を思う

長崎純心聖母会 片岡千鶴子

教区広報委員会は10月1日の教区顧問会の承認を得て、2014年1月号より教区報の題号を「よきおとずれ」から「カトリック教報」に変更する。教区シノドス、信徒発見150周年を準備する長崎教区にあって、神が起こされた過去の出来事を振り返り、未来に希望を見いだす契機としたい。「よきおとずれ」として最後となる本号では、教区報の歴史とその使命について書いていただく。

はじめに

「信仰年」が11月24日「王たるキリストの祭日」に幕を閉じました。「信仰年」は、長崎大司教区にとって意味深い年でありました。なぜなら「教区シノドス」と「信徒発見150周年」を迎える準備の時期と重なったからです。

本年の「よきおとずれ」2月号は、「信仰年から教区シノドス」に向けての3部会を取り組み状況を、9月号と10月号では中央委員会委員長による「教区シノドス」の開催準備の進捗状況が説明され、11月号は、紙面を増やして2011年に実施した「教区シノドス」アンケートの分析結果の一部が公表されました。来年5月に開催が迫った「教区シノドス」の最終準備が「信仰年」の祈りのうちに進められて来たことを、教区報の報道を通して実感しました。今後も教区報は教会と信徒たちを結ぶ大きな使命を担っていくことでしょう。その意味でも教区報の歴史を振り返ってみることは、意義あることと思ひ、若干の考察を試みました。

1.「教区報1000号」の歴史

「よきおとずれ」の2012年11月号が「教区報1000号」の記念号として発行され、創刊者の初代邦人教区長早坂司教様と教区報発行の次第について特集が組まれたことは、皆様の記憶に新しいことと思います。特集記事の中に、「長崎教区の主な出来事」という年表が掲載されていますが、年表の項目の中に教区報の「1000

号」までの「主な出来事」も取り上げてあります。

「主な出来事」とは、①1928年「長崎カトリック教報」発刊 ②40年「長崎カトリック教報」廃刊 ③48年「カトリック教報」復刊 ④67年「長崎大司教区広報委員会」発足 ⑤94年「カトリック教報」800号発行 ⑥2000年、題号が「カトリック教報」から「よきおとずれ」に、発行所が「カトリック教報社」から「教区広報委員会」に変わる ⑦12年「よきおとずれ」1000号発行 の7項目です。中心になっているのは教区報の題号と教区報の所管の移り変わりです。

2. 教区報の創刊と「長崎カトリック教報」の使命

教区報「長崎カトリック教報」創刊号の「発刊の辞」には、「カトリック教会」という信仰共同体の一員である私たちは、「カトリック信徒」であることによって「世界中のカトリック信徒」と結ばれて同じ信仰の道を歩んでいる。「長崎教区のカトリック信徒」たる私たちが、なおいっそう同じ心を緊密に結びつけて同じ道をたどるために、今回「長崎カトリック教報」を発行した。この教区報には長崎の信徒のカトリック精神を高め、さらにはカトリックを知らない日本人にカトリックを知らしめる使命がある。この「長崎カトリック教報」を、わが教区の布教の先駆隊として育ててゆきたいと、教区報を発行した目的が述べられています。

題号とは新聞や種々の機関紙、

また書物の表題、つまり名称のことです。「名は体を表す」といわれるように、題号には出版物が目指す内容を端的に示す言葉が選ばれます。教区報の題号を「長崎カトリック教報」と命名したこと、私は早坂司教の司牧者としての見識と先見の明をみる事ができると思うのです。

3.「天主公教会」「公教会」または「公教」の呼称について

「信徒発見」後の復活した日本の教会の課題の一つに、教会用語の問題がありました。今そのことについて詳細に述べる暇はありませんが、「カトリック教会」という言葉を取り上げてみますと、現在普通に使っているこの言葉が、まだ明治・大正期には使われていません。「カトリック教会」「カトリック」の正式日本語は、「天主公教会」「公教会」または「公教」が用いられていました。

「カトリック」を「公教」と邦訳した次第については不勉強で確としたことを承知していませんが、管見による最初のものは、1869(明治2)年の再刊版『聖教初学要理』の「卷之三 信道之事」の第9箇条の第1節にある「カトリカにて在す聖会を信じ奉る」の文中で「カトリカ」の語の下に割り書きして「訳して公教義とす」とあるものです。明治5年刊本にも同様の割り書きがあります。1881(明治14)年に出版された最初のカトリック雑誌の題号は『公教万報』、1896(明治29)年刊の『天主公教要理』は、東京築地の「天主公教会」発行・

編輯、売捌所は「各地方天主教教会」となっています。1899(明治32)年7月に宣教師および教会建物の届出制度が内務省令によって公布されたとき、同年9月26日付で東京都に提出している東京教区オズーフ大司教の「宣教届」の記入項目「宗教の名称」に「天主教」と明記されていますので、この頃には日本の「カトリック教会」は、「天主公教会」「公教会」または「公教」が正式な名称になっていたようです。

5.「公教」から「カトリック」を

1920年代から教会のカトリック・アクションが世界的な広がりをもつて活動するようになり、万国カトリック青年会が組織されています。「公教青年会」も1922年に加入し、活躍の場を世界に広げました。国際的な活動が広がってきた時、問題になったのが日本の教会の「天主公教会」という呼称でした。この呼称では世界のカトリック教会とのつながりを示さず、無縁のものと思われかねないと思案したのです。山本少将は「カトリック教会」という呼称を用いるべきであるという運動を起こしました。

「公教青年会」は1923年1月1日付で機関紙『公教青年時報』を発刊しましたが、5月には、山本信次郎会長長の強い意志で「カトリック・タイムス」に改名しました。

1925(大正14)年、イタリアで叙階して帰国した岩下壮一神父が、出版活動の拠点としてカトリック研究社を設立し、機関誌を『カトリック』と命名して発刊したのも、岩下神父が山本信次郎会長長の願いが那邊にあるかを知り、共鳴する者の1人だったからです。1924(大正13)年10月には「第1回全日本カトリック教徒大会」と銘打たれた全国信徒大会が山本信次郎会長を中心に企画運営されています。このように徐々に「カトリック」という用語は広まってきましたが、1926(昭和元年)の「カトリック・タイムス」紙面の「東京公教神学校開校」の見出しのように、現実には「公教要理」「公教会」など日常的に使用され、「カトリック」が教会用語として定まるのは、戦後を待つことになるのです。ちな

なみに「カトリック・タイムス」は、1931(昭和6)年から『日本カトリック新聞』と改称、「カトリック中央出版部」に移管され、カトリック教会の機関紙「カトリック新聞」として現在に至っています。

6. 早坂司教と「長崎カトリック教報」の発刊

先に述べた1920年代の日本は、バチカンと正式の外交関係が樹立されていないにもかかわらず政府のバチカン外交重視策が進められ、教皇使節は大使と同格の待遇をもって遇された時代でした。1921年、皇太子(昭和天皇)が初のヨーロッパ旅行の途次、バチカンを訪問、教皇ベネディクト15世と会見した時、側近の山本少将が活躍したのはこの時のことです。早坂司教は教皇使節付秘書として常に使節に同行、同席し外交の第一線に立ち会ったことにより、日本の教会の行くべき道を、あるべき姿を考えることになったと思ひます。長崎教区長として着手した事業の範となっていたのは、山本少将が率いる「公教青年会」の活躍です。「長崎カトリック教報」創刊号に続き第7号までに掲載される、早坂司教のカトリック青年連合会の結成と組織的活動への呼び掛けに、長崎教区における青年会が信仰を深め、研究・活動に励んで日本の「カトリック化」に取り組むことを強く期待していることをうかがうことができるのです。

早坂司教にとって『長崎カトリック教報』は、長崎の教会が「天主公教」の時代から脱皮して真の「カトリック教会」を築く決意の表明でもあったのではないでしようか。

7. 題号と発行の所管の移り変わり

年表の項目にある「長崎カトリック教報」から「カトリック

教報」へ、「よきおとずれ」への教区報の題号の移り変わりについては、ここでは詳述しませんが、ただ一つ、「長崎カトリック教報」から「カトリック教報」へと変わって「長崎」が外されたことには深い意味がなかったのではないかと私考しています。

第195号(昭和11年12月1日付)から発行人が、浦川和二郎神父から里脇浅次郎神父に変わります。教区報も題号の書体が変わるのですが、刻まれた銅板に「長崎」の文字と「カトリック」の「ッ」の文字を彫り忘れられしく、印刷では「長」「崎」と促音の「ッ」の文字を別に書いて貼り付けたように見えます。それが第210号では外したので、促音の「ッ」なしの「カトリック教報」の題号の銅板印刷になっていきます。教報の紙面ではその説明を見つけることができないので、私の推察が正しいのかも不明です。1940(昭和15)年の出版物統制令による廃刊号までそのままです。1948(昭和23)年4月15日付の復刊号は書体も新しく「カトリック教報」の題号で印刷されています。

2000年の1月号から『よきおとずれ』に変わったことについては、第三の千年期、2000年の大聖年を前に新しい題号が一般公募されて採択されたという経緯で、長崎教区民が参画して周知のことですのでここでは触れません。また、教区報の所管の移動は、教区報が長崎大司教の直轄の出版物であることとを明確に示すためであることが、第859号の『よきおとずれ』において説明してあります。

『長崎カトリック教報』の題号を巡る回顧がこのように思わぬ長さになりました。題号が長崎の教会の新しい幕開けの時代の胎動を示すものであったとすれば、21世紀の激動の変化の時代の胎動を教区報はどのように伝え、私たちはどのように聞き分け行くのかと、教区報の使命に思いをはせながら結びとします。



信仰年連載企画
長崎はなぜ長崎を棄てるのか(最終回)

拾い集めたら

ここに長崎の教会が

長崎教区司祭 烏山 邦夫

隠れたことを

まだ夜も明けやらぬ午前4時、明かりの灯った一軒家から祈りが漏れ聞こえる。サナ婆さんの一日の始まりだ。朝の祈り、聖母マリアの連祷、召命のための祈り、ロザリオ。父なる神さまと早々に旅立った夫と都会に暮らす子どもたちと、心通わす祈りの時は愛しい人との会話のようにあつという間に過ぎていく。朝餉をすませて玄関を開ける頃、五島灘の朝日はやつと顔を出す。曲がった腰を伸ばすためゆっくり両の腕を天に差し上げると、サナ婆さんは決まって「よし」と気合を入れる。そして、教会へと続く100歩余りの道を黙々と竹ぼうきで掃き清めていくのだ。だれに頼まれたわけでもない。自らに課した務めは、一日も欠けることなくもう30年が過ぎた。

ときおり労いの言葉をかけると、「なーんのこれしき。親たちの捧げもんには比べたら足元にも及ぶもんですか!」と、サナ婆さんはケラケラと屈託のない顔で笑い飛ばす。そんなサナ婆さんも、もう87歳になる。小さな島の教会で一緒に祈ってきた年寄り仲間たちは知っている。大病を得て何度も手術を受けてきたサナさんが、今はもうすっかり体力も尽きていることを。それでもいつもの時間になると、サナ婆さんの竹ぼうきの音が、祈りのように島の山野にこだまする。

島の入り口に「教会を世界遺産に」の幟が掲げられてから、毎日多くの観光客が掃き清められた道を行き来するようになった。「ここはいつ来ても、塵ひとつなく綺麗にしていますね。町の清掃費も馬鹿にならないでしょうね。」建物ではなく行き届いたたずまいが人の心に届く。先日、テレビ局を伴った大手旅行会社が、地域貢献の名目で一時間だけ清掃活動のパフォーマンスを演じていった。その頃、サナ婆さんは人気のない裏の畑で、祭壇に飾る花の苗を植えていた。「教会は世界遺産だ、島おこしの宝だ」(ヨハネ2・16参照)と言われても、サナ婆さんにはそれが何のことか分からない。

100年前、親たちが近くの石を切り出し、10年かけて積み上げてきた教会堂は、「神さまのいなさるところ、ミサをささげ、一緒に祈ってお恵みをいただく聖なる家」。だから親たちがそうしてきたように、しみも汚れもないように、大事に大事にするところなのだ。教会は観光客を呼び込む見世物小屋でも演劇堂でもないことを、サナ婆さんはだれよりもよく知っている。だから今はうら悲しい。「宣教」の意味は知らなくても、神さまへの思いはどうしたら育ち、子や孫に伝わっていくかを彼女は身をもって知っている。観光バスが来る頃、彼女の姿はもうそこにはない。サナ婆さんが頼りにしているのは、お上に顔のきく代議士でも役人でもない。隠れたことを見ておられる慈しみ深い父だけを相手にしてきた(マタイ6・1・4参照)。だから、人に言えない苦労をみんな捧げものに変えることができたのだ。毎朝掃き清めているのは、本当はサナ婆さんが踏み固めてきた祈りの道なのかもしれない。ここに鍛え上げられた長崎の信者がいる。

拾い集めたら

何を思ったのか、青年海外協力隊で農業指導をしていた弟が、フィリピンはミンダナオ島の小さな町で児童養護施設「ハウス・オブ・ジョイ(歓びの家)」を始めて17年が経つ。「見えない神さまの愛を見える形に。」先立つ資金もなく、人の善意と神さまの導きだけを頼りに、なり振りかまわず子どもたちと生き始めた。神さまは見捨てないお方、だから人も見捨ててはならない。本気なのだ。何が弟をそこまで駆り立てたのか。親から受けたのは信仰だけではない、糖尿病がおまけつきだった。その病が悪化して2年前右足を脛から切断、昨年3月には脑梗塞で倒れ、言語障害の後遺症を得た。それでも、ミンダナオで結ばれた妻アイーダが押す車椅子で、施設運営の支援を求め日本中を駆け巡った。しかし、その3カ月後には残った左足も悪化、また膝から下を

切り落としてしまった。「神さまからもらったものだから、いつでも返します。神さまの計画があるはずです」(ヨブ記1・21参照)。タルマのようになんでも、弟は涙と鼻水を流し、ゆがんだ口で笑って見せた。

両足も言葉も失った弟は、同情され、励まされ、やがて多くの支援を抱えて子どもたちの待つ我が家へ戻った。しかし、待ち受けていたのは季節外れの巨大台風「パブロ」だった。「歓びの家」は難を逃れたものの、近隣の村落では千人以上の死者が出て、被災した人たちは家も食料もなく、断崖絶壁でうづろにしゃがみこんでいた。苦労と悲

惨さには慣れているとはいえず、涙が溢れて止まらない。日本で同情され袂にそっと入れてもらったお見舞いを、すぐに米と水と粉ミルクと干し魚に換えた弟は、子どもたちと職員を総動員して被災地に配って回った。うらぶれて涙を拭く暇もない人たちが、受け取ったわずかな水と米を隣の人と分け合い、励まし合う姿を見て、弟は慰められたと語ってくれた。

思えば、弟はいつもそうして生きてきたように思う。たったこれだけで何ができるのかと、みんなが尻込みするところに身を置いてきた。しかし、なけなしの人生と一途な思いを差し出したら、いつも不思議なみわぎに遭遇してきたのだ。だから、人の情けと神さまの恵みを無駄にしないように大切に、大切に生きてきた(ヨハネ6・1・13参照)。日本から福祉を学ぶ多くの学生が「歓びの家」に研修に訪れる。そして彼らの中の幾人かは、弟夫婦と子どもたち

を養う神を「私たちの父よ」と呼ぶようになって帰る。弟は、残ったパンくずを拾い集めたら12の籠にいっぱいになることを本当に知っている。だから、先のことなど何も心配していない解放された人のように私には見える(マタイ6・25・34参照)。

長崎の信仰を内向きだと評する人もいる。信仰に外向きも内向きもない。幼子が母親の腕に安心して身を任せるように、真の信仰は神が内には深め、外にも溢れさせてくたさる。ミンダナオの小さな町に派遣され、信仰を支えに気前よく生きる長崎の信者がここにいる。

ここに長崎の教会が

「私は信者で良かったよな。そうじゃないなら、どうの昔に子どもば道づれにして人生を終わってました。台風の時に巻き込まれて、夫と息子が変わりはてて帰ってきませんでした。でも、あのときはなーも覚えとらんとよな。ただ、ロザリオばしとりました。そしたら、いつの間にか過ぎていきました。私どんがごと平凡な人間には、訳の分からんことはいっぱいあります。でも、マリアさまも訳の分からんことはそつと胸に納めておいたといえますから、私どもも真似てそうするとです。いつか、分かれるときの来ると信じて。くよくよしたらカトリック信者じゃなかですもんね」(ルカ2・50・51参照)。その後、女手ひとつで子どもたちを育てあげたたくましい母の信仰告白である。いざというとき、素朴な信者

たちは聖母の名を呼ぶ。十字架のもとから派遣された聖母は、今も苦しむ人の傍らにそつとたたずんで、復活のときを共に待っていてくたさると信じているからだ。

「お父さん、そこまでせんでもよかたい。頼むからやめてくれんね。」大学病院で末期癌を宣告された父親は、さつさと島に戻り、痛み止めの点滴のビンを下げたキャスターを引いて、毎朝行きたかった祈りの道を通ってミサに与った。見るに見かねて家族はたしなめる。「早よう死にたかとお父さん。いただいた病気のつらさは捧げるだけで十分たい。じつと寝とってくれんね。」すると父は、「イエスさまはおれのためにいのちを捧げてくたさった。おれのオヤジもお袋も、おれがまともに生きるために全部捧げてくれた。それに引き替え、おれはもう仕事もできんし、教会の手伝いもできん。せめて、このボロ雑巾の体を引きずって、ミサなり与って捧げんば、なんば捧ぐつとかよ。捧げさせてくれんね。そうせんば収まりのつかんとよ。」最後まで、ミサとつながって自分を捧げようとした筋金入りの父親が見せた救いの話だ。

「神父さま、初めて給料もらったよ。これで、私も一人前です。」そう言って、その娘は給料袋から紙幣を抜き出すと、「これで、亡くなった爺さんと婆さんのためにミサをささげてください。私が看護学校に行けたのも祖父母のおかげなんです。仕事に就いて最初の給料をいただいたら、それで

ミサをささげてもらうのが私の夢でした。初物は、一番いいものはまず神さまに捧げなさいって、祖父母はよく言っていました。それが本当の感謝のしるし、信者のしるしだって。私も感謝しながら生きたいのです。」底抜けに明るい、若い看護師が示した信仰のしるしを見た。

受け入れること、捧げること、最後は感謝して終わること。受け渡されてきた長崎の信仰は落ち着きに満ちている。

「『信仰の門』はつねにわたしたちに開かれています」(『信仰の門』1)という言葉で、教会はこの一年間、私たちを信仰年へと招いた。「信仰をとつたら私たちには何も残らないのです」と、今も公言してはばからない長崎の信者たち。長崎の教会はまだ長崎の信仰を捨ててはいない。そこ、ここに散らばっている信仰を拾い集めたら、これからの長崎の教会が何をすべきなのか、その行方が見えてくる。ここに確かな長崎の教会がある。だから、心をひとつにもう一度信仰の門をくぐり、飾らない楚々とした素朴な教会に立ち戻りたい。喧騒と目立つことを求める教会に、信仰が育つたためしはないのだから。

「二人で生きることができないように、だれも一人で信じることはできません。自分で自分に生命を与えることができないように、だれも自分に信仰を与えることはできません。信仰者は、信仰を他の人から受け取りました。それを他の人に伝えなければなりません」(カテキズム166)

いま、降りていく人へ

下五島地区・ユスト高山右近を学ぶ

11月10日、下五島地区は「信仰年」を締めくくる記念講演会を福江教会で開催し、約200人の信徒が熱心に耳を傾けた。

お告げのマリア修道会のシスターによる聖歌が祈りの雰囲気を整え、講演がスタート。講師の古果 馨師(長崎大司教館)は、「いま、降りていく人へーユスト高山右近という生き方」をテーマに、カトリック信者の使命と誇りを語った。

古果師は、詩人・工藤直子さんの詩「あいたくて」



を紹介し、神が、時のしるしとして右近の信仰を用意されたのだろうと説明。そして、右近の生涯に見られる「出会いの神秘」「苦しみの中の神秘」「復活の神秘」とキリストの神秘を一致させて見るとき、福音が鮮やかになると話した。さらに「権力にもおねることもなく、真逆の価値観を選択した右近の霊性は、その時代に異彩を放った。それは今の教会が預言職、牧職、祭司職を果たす上で模範となりうるもの」と論じた。「信仰年」を終える信者に新たな道標を与えるものとなった。

2地区で信仰年を締めくくる講演会

カルト被害の現状と対策

長崎南地区・真の福音の見極めを

信仰年も残すところ1カ月となった10月27日、長崎南地区は宗教や人権、児童虐待問題に取り組んでいる紀藤正樹弁護士(第二東京弁護士会所属)を講師に迎え、特別講演会を中町教会で行った。テーマは「カルト被害の現状と対策」巧妙な手口の裏側を知ろう。教区エキュメニズム・諸宗教委員会後援。

特定団体による霊感商法の被害、消費者相談などは現在も減る傾向にない。講師はその現状を解説し、団



体の資金獲得の手口、マインドコントロールの恐怖、被害者の家族の絆、資産だけでなく人格そのものを破壊している経過までを話した。また、1985年に日本カトリック司教団が発表した「世界基督教統一神霊協会に関する声明」を紹介。「そのようなキリスト教をうたう団体には福音が存在しない」と注意を呼び掛け、約250人の聴衆は深くうなずき聴き入っていた。市役所、県の消費者センター、人権問題に携わる弁護士らも参加し、関心の高さが見受けられた。

参加者の1人は、「一カトリック信者として信仰年を過ごしている中で、カルト被害の対策もやらなければいけない課題の一つである」と語った。

19人が神学校体験入学



各教会で子どもの数が減少し、司祭召命に関してもさまざまな問題がある中、将来「神父様になってもいいかなあ」と思っている子どもたちを集めて、10月19、20の両日、長崎カトリック神学院で「神学校1泊体験入学」を行いました。

から17人、福岡教区から2人、合計19人の神学生の卵たちが参加してくれました。特に浅子教会からは、中学生を含めて8人が参加してくれました。岩下裕志神父様に感謝です。

1日目は自己紹介の後、それぞれが4つの班に分かれ、神学生とチームを作り、お互いを知るために体育館でレクリエーションをしました。作業では神学生たちの指導で指口ザリオ作り、聖体賛美式をして夕食はシスターが作ったトルコライスでお腹いっぱい。夜はロザリオの後、神学生が考えたゲームをし、晩のお祈りをして就寝。

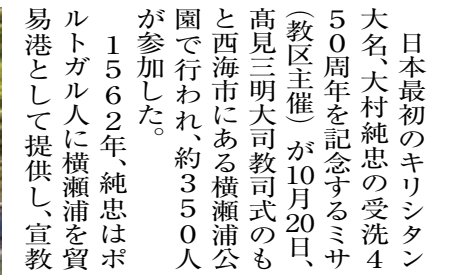
2日目は、召命を祈願してミサをささげ、朝食後、3人の神学生が神学校での生活や勉強のために通う南山中学、高校の話をしました。最後に神学生からのメッセージと集合写真付きの手作りの色紙を記念にもらい、昼前に終了しました。

参加した子どもたちに聞いてみると、司祭への召命の芽生えはまだ不十分のようですが、司祭になりたいという気持ちが育ち、神様の呼び掛けに素直に応えられるように、参加した子どもたちをはじめその家族への神様の恵みを祈りながら、院長として見守っていました。

体験入学を企画し、実行した神学生たちも、子どもたちを通して、自分の召命について考える機会になったと思います。来年、神学生の数が増えることを期待しています。

長崎カトリック神学院 院長 眞浦健吾

大村純忠受洗450周年



日本最初のキリシタン大名、大村純忠の受洗450周年を記念するミサ(教区主催)が10月20日、高見三明大司教司式のもと西海市にある横瀬浦公園で行われ、約350人が参加した。

1562年、純忠はポルトガル人に横瀬浦を貿易港として提供し、宣教師からキリスト教を学んだ。その翌年の6月、20数人の家臣と共に受洗した。長崎の領主長崎甚左衛門もその一人であったと考えられる。純忠の霊名はバルトロメオ。

大司教は説教で「信仰年」として終りますが、教皇様の意向に「信仰の歴史をたどり直し学習する」とあります。いろいろな困難の中で信仰を貫いた純忠の受洗を記念するミサに、多くの方々が参加されたことを感謝します」と話した。

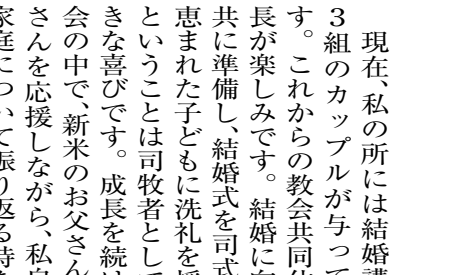
ミサ後、教会跡地を通じて、横瀬浦郷の土井宣博氏が提供してくれた土地に整備された横瀬浦巡礼地まで巡礼。祭壇と朗読台、十字架の祝福式が行われた。ミサに先立ち、西海史談会の本田宏臣会長の講演もあった。

50年前のカトリック教報(昭和38年4月1日号)には、大村純忠の受洗400年に際して、その意義が次のように語られている。

「大村純忠が洗礼をうけて熱心なキリシタンになったことは大村領に六万数千人のキリシタンができる発端となったのであるが、さらにそれは長崎や、島原半島にキリシタンが栄える原因にもなったのであったから、純忠の受洗は、日本キリシタン史にとっても、今日の長崎教区にとっても非常に記念すべき出来ごとであったといわねばならない。」

秋の公開聖書講座 澤田豊成師を講師に迎えカトリックセンターで行われた。テーマは、「あなた方はみな、信仰によって神の子なのです(ガラテヤ3:26)」。パウロが語るキリスト者の神秘。

再び家庭を振り返る ⑬



現在、私の所には結婚講座に3組のカップルが与っています。これからの教会共同体の成長が楽しみです。結婚に向けて共に準備し、結婚式を司式して、恵まれた子どもに洗礼を授けるということは司牧者としての大きな喜びです。成長を続ける教会の中で、新米のお父さん、お母さんを応援しながら、私自身が家庭について振り返る時をいただいています。

ところで、キリスト者の家庭はどうあるべきなのでしょう。が、行われた。ミサに先立ち、西海史談会の本田宏臣会長の講演もあった。

「大村純忠が洗礼をうけて熱心なキリシタンになったことは大村領に六万数千人のキリシタンができる発端となったのであるが、さらにそれは長崎や、島原半島にキリシタンが栄える原因にもなったのであったから、純忠の受洗は、日本キリシタン史にとっても、今日の長崎教区にとっても非常に記念すべき出来ごとであったといわねばならない。」

秋の公開聖書講座 澤田豊成師を講師に迎えカトリックセンターで行われた。テーマは、「あなた方はみな、信仰によって神の子なのです(ガラテヤ3:26)」。パウロが語るキリスト者の神秘。

講師は始めに、新約聖書の中に14あるパウロの手紙について、(パウロは)特定の問題に対する答えを、キリストの福音の神髄から導き出すという形をとっていることに触れた。キリスト者が一体となつて、つまり一つの有機的神秘体である教会を造り上げることによって、初めてキリストとの一致を成し遂げることができるとのこと。それがこの「キリストの体である教会」のイメージが示す最大の神祕だと伝えた。

「若者の福音化」の主題では、19の項目が「提言」となっている。ここでは「提言」が教区諸活動部門、諸修

「提言」が教区諸活動部門、諸修

「提言」が教区諸活動部門、諸修

「提言」が教区諸活動部門、諸修

「提言」が教区諸活動部門、諸修

「提言」が教区諸活動部門、諸修

「提言」が教区諸活動部門、諸修

「提言」が教区諸活動部門、諸修

「提言」が教区諸活動部門、諸修

「提言」が教区諸活動部門、諸修

提言案について

「提言案」が教区諸活動部門、諸修

「提言案」が教区諸活動部門、諸修

「提言案」が教区諸活動部門、諸修

「提言案」が教区諸活動部門、諸修

「提言案」が教区諸活動部門、諸修

「提言案」が教区諸活動部門、諸修

「提言案」が教区諸活動部門、諸修

「提言案」が教区諸活動部門、諸修

連載・教区シノドスから恵みの年へ ④

代の宣教「疎外された人々への教会の関心と配慮」

代の宣教「疎外された人々への教会の関心と配慮」

代の宣教「疎外された人々への教会の関心と配慮」

代の宣教「疎外された人々への教会の関心と配慮」

代の宣教「疎外された人々への教会の関心と配慮」

代の宣教「疎外された人々への教会の関心と配慮」

代の宣教「疎外された人々への教会の関心と配慮」

上五島地区堅信式

上五島地区堅信式が、11月10日午後2時から青

上五島地区堅信式が、11月10日午後2時から青

上五島地区堅信式が、11月10日午後2時から青

上五島地区堅信式が、11月10日午後2時から青

上五島地区堅信式が、11月10日午後2時から青

上五島地区堅信式が、11月10日午後2時から青

秋の公開聖書講座

秋の公開聖書講座 澤田豊成師を講師に迎えカトリックセンターで行われた。

秋の公開聖書講座 澤田豊成師を講師に迎えカトリックセンターで行われた。

秋の公開聖書講座 澤田豊成師を講師に迎えカトリックセンターで行われた。

秋の公開聖書講座 澤田豊成師を講師に迎えカトリックセンターで行われた。

館長 下窄英知

ある信徒が死亡しない限り、台帳を開くことはないかも知れない。共同体の中にどんな世代がいて、どんな男女比で、今現在どのような霊的狀態にあつて、どのような指導が必要なのか、誰を紹介してあげればその人が共同体の交わりを豊かにできるのか、台帳を通して見えることもあると思う。だが堅信や婚姻の後、死亡まで台帳に目を通すことがなければ、見えるものも見落とすかもしれない▲教区長には小教区訪問の折に台帳に目を通してもらい、署名をいただく。その時点で主任司祭はどんな準備をして台帳を提示しているのだろうか。

(K・N)

牢屋の窄殉教祭

信仰を公言する勇気を



10月27日、久賀島の牢屋の窄で殉教祭が行われた。下五島地区長・下口勲師(福江・浜脇・井持浦小教区主任)司式のもと行われたミサには、約200人の信者が参加した。下口師は説教の中で、殉教地を整備し支えてきた浜脇教会の歴代の主任司祭たちと信徒の方々の努力に感謝しながら、「信

徒の信仰告白が迫害の原因でした。牢屋の窄殉教者の勇敢な信仰は私たちに反省を求めているのか。私たちに必要なのは、自分の信仰を公言する勇気を持つことです」と語り、受け継いだ信仰を守り伝える使命に生きるよう、参加者たちに呼び掛けた。

黒瀬の辻殉教祭

西玄可家族の祈りに倣う



1865年3月17日の喜ばしい知らせは、桐上五島)出身のガスバルと作によって五島にもたらされた。キリシタンたちは、持っている護符を集めて焼き捨て、寺や神社と縁を切りたいと代官に申し出た。これが五島のキリシタン検挙事件「五島崩れ」のきっかけとなった。その中でも、1868年の牢屋の窄の責めは過酷さを極めたといわれる。

11月10日、生月・黒瀬の辻殉教地で、福者ガスバル西玄可とその家族殉教記念ミサ(山田小教区主催)が行われ、約280人が参加した。ミサの主司式を務めた岩村知彦師(田平小教区

主任)は、西玄可家族が単なる祈りではなく、お互いを支えているという喜びをもった祈りで結ばれていたと説き、私たちも家庭で喜びのうちに支え合う祈りをささげようと語り掛けた。

大槌ボランティア募集

●1月16日(木) 22日(水)
●2月13日(木) 19日(水)
●3月13日(木) 19日(水)
(12/24締切)
(1/29締切)
(2/25締切)
定員10名程度。申し込みは所属小教区へ。問い合わせは、教区本部事務局(渡辺)まで。
TEL 095・842・4450
FAX 095・842・4460

キリシタン洞窟ミサ

現地でのミサは3年ぶり
土井ノ浦小教区(主任 鶴崎伸也師)主催で行われている「キリシタン洞窟ミサ」が、天候に恵まれた11月4日、洞窟のある無人島で開催された。天候によつては上陸できず、土井ノ浦教会聖堂でのミサになる年もある。最近では3年前と今年、現地でのミサが実現した。



祭で、今年新調して島の高台に設置し直したキリシタン像のもとで個人的に祈りをした後、ミサをささげた。鶴崎師は説教の中で、「五島では算木責めといつて、角材に足をめとされ、歩行が困難になるほどの苦しみを受けたキリシタンもいた。すべてを捨てても信仰を選んだ、この無人島に避難した信徒の勇気に私たちも倣いたい」と話した。ミサ後、土井ノ浦小教区信徒の奉仕で、その場で昼食をいただき、来年もまた上陸できることを願いつつ島を後にした。

カトリック広報と著作権

東京・潮見で全国教区広報担当者会議



10月15日から17日まで、東京・潮見の日本カトリック会館で「全国教区広報担当者会議」が開かれ、今年は11教区から14人が参加した。

2つの講演があり、1日目午後には、菊地 功司教(新潟教区)が「広報教令50周年を迎えた今、ソーシャルメディアを生かした教会に向かつて」と題し、第2バチカン公会議の教令、その後教皇庁広報評議会から出された指針、また、今年の世界広報の日メッセージを用いて、現代世界において、カトリック広報が目指すべき道筋について話した。ことに現代におけるネット利用について、慎重さをもちつつ、しかし積極的に

対話のツールとして利用し、福音宣教に資するものとするよう、参加者に呼び掛けた。2日目午後の講演では、TBSテレビ編成局メディアライツ推進部の植井理行さんが「ネット上での著作権・肖像権について」と題し、教区報などの紙媒体、ホームページなどのネット上で留意すべき著作権や肖像権の問題について概説した。参加者からは個別の事例について質問が出され、著作権なしで利用できるもの、著作権を侵害することになるものなど、具体的に説明してもらった。

その他、各教区での紙媒体、ネット利用による広報の現状、問題点などの情報交換も行われた。教区間、中央協議会と教区広報間での連携をさらに深めるための連絡方法も検討された。次年度も、教区広報の技術向上のため同様の会議を開催する方向で、候補となるテーマが参加者から集められた。

上智大学創立100周年

大浦天主堂で記念講演会

長崎在住の同大卒業生・在学生を主な会員とする同窓会、長崎ソフィア会(林田剛会長)が10月30日、大学創立100周年を記念する講演会を大浦天主堂で開催し、約130人が集まった。

新部泰司副会長のあいさつに続き、講演会では二十六聖人記念館館長のデルカ・レンゾ師が「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」資産候補を写真と交えて紹介。続いて高見三司大司教が、カトリック教会の視点から「教会群」の世界

いごう園

▼イエズス会立山修道院お知らせ ●祈りの一日
①12月9日(月) ②12月11日(水) ③12月14日(土) ④12月21日(土) 10時~15時半。 ●祈りの日々
①12月7日(土) ⑧日(日) ②12月21日(土) ③23日(月) ④12月24日(火) ⑤25日(水) ⑥12月29日(日) ⑦2014年1月2日(木) 初日17時~最終日15時。
TEL 095・821・4577

感謝

― 香典返し ―
長崎カトリック神学院
●宮崎達実様(神ノ島) 故ペトロ宮崎保様 故マリア宮崎光子様
右の方からご芳志を賜りました。お礼とご報告を申し上げます。

短信

●第133回クルシリヨ
●11月1~4日、イエズス会立山修道院で中村倫明師指導のもとクルシリヨが開催、11小教区から18人(男性9、女性8、修道女1)が参加した。参加者は次の通り。
浦上2、中町1、鮑ノ浦1、三ツ山1、黒崎1、時津1、三浦町2、俵町3、黒島3、三井薬2、平戸1

第14回枯松神社祭

●毎年長崎市下黒崎町の枯松神社で行われる「枯松神社祭」が11月3日、今年は雨天のため黒崎教会で開かれ、カトリック信者とかくれキリシタンら約120人が参加した。同神社は、キリシタン弾圧時代に海外の信者たちの信仰を指導した外国人宣教師「サン・ジワンさま」を祭った神社。

死者の月に祈る

●11月12日11時から、長崎市の赤城聖職者墓地で、教区のために働いた物故聖職者の追悼ミサが行われ、司祭30人余と信者らが祈りをささげた。17日15時から浦上教会で、教区にゆかりのある聖職者、修道者、信徒のための追悼ミサ(教区主催)が、高見三司大司教主司式で行われた。

クリスマスプレゼント・支援金のお願い

大槌ベースキャンプでは、12月に開催されるクリスマス会のために、プレゼント・支援金のご協力をお願いしています。

支援物資・支援金

- ◇新品の文具類・室内外遊び用品・スポーツ用品・日持ちする特産食品(果物以外の生ものは不可、古着・古本などは不要)
- ◇お菓子類(1人分ずつ配りやすい包装で)
- ◇支援金

送金先 北日本銀行大槌支店 (普) 7016479
カリタスジャパン大槌ベース 代表 古木真理一
連絡先・送付先
〒028-1117 岩手県上閉伊郡大槌町末広町1-4
(1月から〒028-1122 大槌町桜木町9-42へ移転)
TEL 0193-55-5885 FAX 0193-55-5886
メールアドレス otsuchibase@gmail.com



主の平安
カトリック式葬祭・飾付一式

(有) 栄光式典社

代表取締役 ヨハネ 西村 勇二
長崎市 辻町7-18 TEL(095)844-4011
24時間営業 FAX(095)843-9896

ご先祖に心より感謝を・・・

材石 治明

長崎本店 長崎市城栄町13-1 電話 (095) 846-3598
大村店 大村市民霊園内 電話 (0957) 50-3008

タンスの中身は入れたまま
責任ある安全運送!!
(見積り無料・荷造り発送も致します)

貨物保険有り

- ・一般引越
- ・小荷物
- ・荒ゴミ捨て
- ・遠距離
- ・学生引越
- ・ピアノ運搬

24時間営業・年中無休
受付時間 7:00~22:00

水浦運送

シモン 水浦 幹雄
長崎市上野町12-3
TEL(095)847-7151
844-1420

白蟻調査無料・駆除予防工事5ヶ年保証付
白蟻防除施工士

大田白蟻研究所

代表者 マリア 大島 睦子
(〒850-0811) 長崎市矢の平1丁目14番15号
長崎 095-822-8436
FAX 095-822-8488

第19回日韓司教交流会

(東京教区)と姜禹一司教(済州教区)高山右近ゆかりの地などを訪問



参加者の自己紹介に続いて、イエズス会のホアン・マシア神父が「教皇ヨハネ23世『地上の平和』の背景、現代世界に対するその意味と影響」をテーマに講演を行った。

13日は、韓国・水原教区の李・聖孝補佐司教が「Paem in Tears」(涙の祈り)という現代詩の朗読を行い、その後の兼六園や尹奉吉暗殺の地・野田山などを訪

共通の歴史認識を持つと1996年に始まった日韓司教交流会。その第19回交流会が11月12、14日に金沢市内のホテルなどで開催、日韓の司教ら36人、その他、通訳、事務局担当者等が参加し、発布50周年を迎えたヨハネ23世の回顧「バーチェム・イン・テリス」(地上の平和)について学んだ。12日、司教協議会会長である岡田武夫大司教

2013年度クリスマス愛の募金

国内外の被災者のために、ご協力をお願いいたします。

期間	12月1日～14年1月15日
主催	長崎大司教区教区評議会
支援先	大植ベース
ファイリピン中部地震被災者	および台風30号被災者
国内の生活困窮者	自然災害による被災者

第6回日韓女子修道会総長会

お告げのマリア修道会本部で定期総会

3年に一度開かれる日韓女子修道会総長会(USGAPMEC2)第6回定期総会が10月19、24日に長崎で行われ、日韓の総長、通訳、スタッフら計34人が参加した。今総会では、今年5月に開催されたUSG(女子修道会国際総長会連



シタン時代のリーダーシップに学ぶ。総会では、川村信三神父(イエズス会)による基調講話とグループでの

第11回召命祈願ミサ

る道具であると言語、神学生と志願者には「司祭、修道者になつてくださ」と励ました。また他の参列者にも、司祭、修道者を目指す若者たちを「祈り支える召命」があることを論じた。

10月25日、大浦天主堂において、第11回召命祈願ミサが、高見三司教と司祭15人の共同司式で行われ、約160人が召命の誓いを祈った。説教を担当した中野健一郎神父(浦上教会)は、マザー・テレサの言葉を引用し、私たちは神が偉大なことのために使われ

分かち合い、古巣、警神父(長崎大司教館)の案内による島原と雲仙の巡礼があり、キリシタン時代の信徒の信仰と活動にみられるリーダーシップ、教会のありようから現代の奉獻生活の在り方について多くの示唆を受けた。また総会中、長崎市内各地の訪問、全体会があり、最終日は前田万葉広島司教司式の派遣ミサで全日程を終えた。

新刊良書

★クリスマスのほなし

文リメアリー・ジョスリン 絵リアリーダ・マッサーリ 訳リ関谷義樹 「よいしらせをあなたたちにつたえます。きょう、ベツレヘムでひとりのおさなごがうまれま

★長崎の教会群

著リ木下陽一

キリスト教の伝来から

アウレア

木村フサ子修道女

(長崎純心聖母会)



10月16日、肺がんのため聖フランシスコ病院に

神と出会う イエス・キリストと出会う 自分と出会う

カトリック 通信講座

どなたでも、いつからでも、どの講座でも、ご自分のペースでご受講いただけます。やさしく解説されたテキストを通して、キリストと出会い、喜びをもって生きる新たな日々へと導きます。キリストの教えに触れたい方や、より学習を深めたい方にも最適です(全7講座)。

T001	キリスト教とは	キリスト教の概要
T002	聖書入門〔I〕	四福音書(イエスの生涯)
T003	キリスト教入門	秘跡と信仰生活(洗礼準備にも)
T004	神・発見の手引	人生、自然を通して神へ
T005	聖書入門〔II〕	使徒言行録・書簡・黙示録
T006	幸せな結婚	結婚の意味や愛、幸福
T007	生きること・死ぬこと	命に関する問題

受講料 T001～T004 各4,500円(教材費・税込)
T005～T007 各5,000円(教材費・税込)

お申し込み方法

郵便振替用紙に講座名・講座番号(T001～T007)をご記入のうえ、下記にお振り込みください。

振替口座番号 00170-2-84745

加入者名 オリエンズ宗教研究所

お問い合わせ・お申し込み

オリエンズ宗教研究所 カトリック通信講座
〒156-0043 東京都世田谷区松原 2-28-5
Tel 03-3322-7601 Fax 03-3325-5322
URL <http://www.oriens.or.jp>
携帯サイト <http://www.oriens.or.jp/mobile/>

墓地・納骨堂 分譲中

高尾・本原・石神・江平・坂本 他
現地ご案内致します

なが さき せき ちょう
長崎石彫

ヨゼフ 岩永 博明
長崎市梁川町 6-17 岩永ビル
☎(095)862-2469

ハマチ・タイ養殖、アジ・イワシ加工、中型旋網

エテルナ・ワコー(株)

代表取締役 ミカエル 溝口 美義
〒858-0926 佐世保市大湯町 586
TEL (0956) 47-4380

(医) 外尾内科医院

院長 ベトロ 外尾 明利
〒857-1152 佐世保市黒髪町 34-4
TEL 0956-33-5557